

CeMI 気象防災支援・研究センター

# News Letter

## Contents

1. 残暑について
2. 二百十日
3. お天気よもやま話  
～塩害について



# 1 残暑について

気象庁では残暑を「立秋（8月8日頃）から秋分（9月23日頃）までの間の暑さ」と定義しています。

東京における9月1日の平年の最高気温は30.0℃であり普通の年でも9月の最初の頃は、まだ「夏」と言ってもおかしくはない気温です。ちなみに、大阪は9月14日まで平年の最高気温が30℃を超えています。日本列島は南北に長いので、立秋以降の暑さをひとくくりに残暑と言えないのかもしれませんが。西日本・東日本では感覚的に残暑の期間は9月になってからと言えるかもしれません。

過去の記録を見ても東京では1984年9月3日に38.1℃の記録がありますし、大阪も2010年9月5日に36.2℃の記録があります。少なくとも9月の前半はまだまだ夏ですね。

これが、9月30日の平年の最高気温は東京で24.7℃、大阪で26.6℃と、かなり過ごしやすい気温となります。やっと秋を感じられる気温でしょうか。

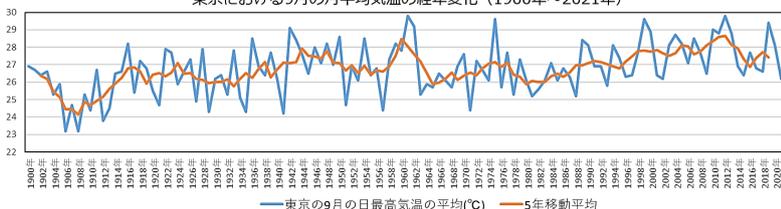
ところで、図に1900年以降の東京の9月の月平均気温の経年変化を示しました。都市化の影響や温暖化の影響がみられるものの9月の平均気温は年々変動がかなり大きいことがわかります。一番高いのが1961年の29.8℃もあります。この年の東京は24日に34.3℃、26日に33.5℃等を観測しており月末まで真夏のような気温となりました。

9月は、年々の変動が大きいばかりではなく、月の中でも気温の変動が大きくなります。例えば、2010年9月上旬の東京の旬平均最高気温は33.4℃と真夏と言っても良いくらいの気温（この年の9月上旬は全国的に「猛暑」と言っても良いくらいの残暑でした）ですが、下旬になると24.4℃と10℃近く気温が下がり、平年並か平年より低いくらいの気温となりました。

このように9月は、真夏から本格的な秋に向かう過程にあり、太平洋高気圧の動向や台風の襲来などのちょっとしたきっかけで残暑が厳しくなったり、あるいは秋の訪れが早くなったりします。

9月は、「秋晴れ」のようにさわやかな感じがありますが、一方で、残暑だけでなく、秋雨前線の活動や台風の襲来など「夏」の影響が強く残る時期でもあります。秋の訪れを楽しみつつ防災にも気を付けたいですね。

東京における9月の月平均気温の経年変化（1900年～2021年）





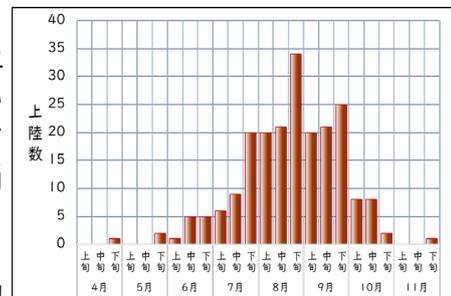
# 2 二百十日

立春の日から数えて210日目、『二百十日』です。今はあまり耳にしなくなってしまう言葉ですが、1年を様々な区切りで表す二十四節季や七十二候とは別に、節分や土用などとともに“雑節”と呼ばれているもののひとつです。現在の暦では9月1日頃で、ちょうど台風が日本に接近、上陸しやすい時期で、農業では特に注意すべき厄日とされてきました。『二百二十日』も同様の意味を持つ言葉です。二百十日という言葉が使われるようになったのは江戸中期頃からと言われています。農業生産が中心であった日本においては台風に伴う強い風や大雨は大変な脅威となります。また、稲だけではなく、ちょうど収穫の時期に当たる果樹などへの被害も大きなものがあります。ひとたび、台風が通過すると広い地域で稲や果樹などが壊滅的な被害に遭うことも珍しいことではありません。自然災害のうちでも、例えば霜害に対しては防霜ファンなどで一定の予防効果は期待できるものの、強い風や雨に対しては現代においても効果的な予防手段はありません。早めの刈り取りや収穫など事前の対策によっても被害を完全に食い止めることはできません。

一方、二百十日という言葉は農業の分野だけで使われているものではありません。地方によっては、漁に出る漁業

関係者の間でも警戒すべき時期の目安とされています。

図は、1951年以降、昨年2021年までに日本に上陸した209個の台風について、10日毎〔旬別〕に上陸した日をグラフに表したものです。このグラフを見ると上陸数ももっとも多いのは8月下旬で、まさに二百十日の直前に当たります。



旬別の台風上陸数

また、もうひとつ興味深いことは7月下旬以降は9月下旬まで、8月下旬を除けばほぼ同じような上陸数で、データで見限り「台風シーズンは9月」というのは思い込みと言えるのかもしれない。

台風による強い風や大雨は直接的に防ぐ手段はありませんが、最近の気象技術の向上で、台風の進路予報の精度は極めて良くなってきました。また、強度の予報も改善が進んでいます。台風が日本に近づく気配が見えたら、5日先までの進路や強度の予報を活用して、被害を最小に抑えるための対策を講じてください。

# 3 お天気よもやま話 ~塩害について

海の近くにお住まいの方は、建物や屋外にある物がさびやすく劣化しやすい等の経験から、海からの風に運ばれてくる塩の影響・塩害を身近な厄介ものとして認識されているかと思います。私も沿岸部に住んでいたころは、台風や荒れた天気の後には車のフロントガラスや家の窓ガラスにキラキラとした塩の結晶を見つけ、急ぎ洗い流した経験があります。また、塩害で見頃を迎えたコスモス畑が大きなダメージを受けたり、鮮やかに紅葉するはずの樹々の葉が色づく前に傷み茶褐色になっているのを見て、とても残念な気持ちにもなったこともありました。

塩害が大きなニュースになるのは台風通過後が多く、農作物への被害が報じられることが多いと思いますが、送電設備の被害も怖いものです。電線を電柱に固定している部分に塩分が付着し、そこに弱い雨が降ったりすると電気がショートし発火することがあります。平成30年台風第24号が上陸し



た際には、塩害が原因で停電が発生し、電車の運行にも影響が出ました。

塩害は、波しがきや塩を含んだ風がもたらすものだけでなく、台風などによる高潮や高波、地震発生後の津波などで海水が陸地に侵入したり川を遡ったりすることでも起きます。東日本大震災でも広い地域で海水に浸かった田畑で稲作ができない状況になり、塩を取り除く対策が取られました。なお、気象庁の予報用語では、気象災害の一つに「塩風害」という用語があり、「海上からの強風により運ばれた塩分粒子により植物や送電線などに起こる災害。『塩害』を用いることもある。」とされています。風がもたらす気象災害として区別する際には塩風害を使う方が分かりやすいかもしれません。

塩は人間にはなくてはならない身近な物質ですが、多種多様な災害の要因となる一面も持ち合わせているのです。



掲載内容へのご意見、その他サービスに関するご相談・ご要望等ございましたらお気軽にご連絡ください。

NPO法人 環境防災総合政策研究機構(CeMI)

気象防災支援・研究センター

〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22ローヤル若葉606号

<http://www.npo-cemi.com/center.html>

☎ 03-3359-7971

☎ 03-3359-7987

✉ [advisory@npo-cemi.com](mailto:advisory@npo-cemi.com)

